

茶の湯文化学会会報 No.30

第30号/2001年9月10日 千606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www2.ocn.ne.jp/~chanoyu/ e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

大きな期待

中村昌生

茶の湯に関する研究は、いろいろな学問の分野で進められてきました。個々の研究が茶の湯という共通の土俵で、報告され討議されることはありませんでした。諸領域で茶の湯にかかわる仕事をしている研究者は孤独でした。ある夜、そんな研究者が「学会を作りましょう」と集まりました。衆議一決、設立に向かつて急速に諸準備が進められ、茶の湯文化学会の設立総会が開催されたのは平成五年十月十六日のことでした。

そこで私が会長に指名されました。任期は二年と定められていましたが、全くその器ではないのに、統投を繰り返し、今年五月の第九回総会において新会長に倉澤行洋先生が選ばれ、やっと私の退任が許されることになりました。

この学会は実に異色な学会であります。茶の湯に関心のあるものはすべて入会できる。従って会員の専門は多領域にわたっており、学術研究者だけで構成されているわけでもない。運営を委任されている理事諸氏は、それぞれの学会に所属しておられますが、既成の学会の慣例がすべて新しい学会に馴染むとは限りません。試行錯誤を重ねてゆかねばならない問題が山積し

ました。こうした学会にとって大切な揺籃期、成長期に微力な会長を支えて、学会の基盤を構築してください。副会長、理事の諸先生に厚くお礼を申し上げます。

学会の設立趣旨は、会誌「茶の湯文化学」第一号に記したとおりであります。学会の目標は共通の土俵を作って、総合的に茶の湯の研究を推進することにあります。これまで異なった分野の中で行われてきた茶の湯に関する研究にも優れた成果がありました。そうした成果や今後の研究が、一つの土俵で交錯することによって、総合的な茶の湯学の発達と熟成を期待することができるとおもいます。

近來進歩を見せる茶の湯研究の成果をもってしても、研究者が心底深く確信している茶の湯文化の深遠な魅力を、国内外の人々に理解させるだけの説得力を発揮できていないのはなぜか、それは共通の土俵がなかったからではないでしょうか。

すでに六世紀にも及ぶ歴史をもつ茶の湯の研究はまづ歴史的な研究が基礎となり、史料収集の努力が不可欠であります。しかしこの作業や方法にとどまり、史実の検証にだけ終始してはならないと思います。

茶の湯はどの部分をとりあげても、人や個性とかかわり、心の動きと無縁な部分はありません。点前においても、僅かな作法や道具の置き方に、亭主の心遣い、心の機微が示されます。それは順序や型にはあらわれないものです。また道具の取り合わせ方にも亭主の心の働きが反映します。

道具類にしても、例えば一つその茶碗にも作者のさまざまな好みや意図が働き、作者の心中に宿る茶の宇宙が託されているのです。茶室の写真集を見て、「どれもこれも同じように見える」という人によく出会います。しかし、おのおのの間の僅かな相違こそ大切で、そこから作者の創意を読みとることができるとは思います。

私の若い頃の入門書は、桑田忠親先生と西堀一三先生の茶道史でした。桑田茶道史には物語を聞くような楽しさがあったし、西堀茶道史からは、たんに茶の湯の史実を教えられるだけではなく、昔の茶匠たちの心の働きのようなものが伝わってきて、茶の湯の世界に強く引き寄せられてゆくようでした。利休の茶を探求して、史料を渉猟し『利休の茶』（岩波書店刊）の大著を世に送られた堀口博士は、その序文のなかで「茶の湯の心を知りた

い」のが研究の目的であると述べられています。先生は西堀先生とも心の通う交わりを結んでおられました。茶の湯の心を探究するという学問の道においても、志を共にしておられたのだと思います。

一九五〇年代に比べると、今日茶の湯研究の条件は遙かに向上しています。新史料が掘り起こされ、秘蔵された史料の所在もかなり周知できるようになり、複写も容易になりました。如何に史料が豊富になっても、特定の問題の解明にはなお史料の探索と複雑な考証が必要となるのはいうまでもなく、史実の追求には限界はありません。

そうした歴史的な事象の解明と共に、その背後を照らし出す考察がもっと進められてよいのではないのでしょうか。新しい作品が紹介され、それが生まれた歴史が明らかにされると同時に、その作者はどのような心の構え方でそれを創り出したか、作者はその作品にどのような思いを託そうとしたかなどを、知ることが重要であると思います。

茶の湯という文化は、多岐にわたっていて実に複雑な構造を持ち合わせています。史実の検証による構造体の外側の探査だけでなく、内側からの探査に挑むことは、茶の湯の

実体に肉薄するために有力な道ではないでしょうか。今回哲学・美学を専攻される倉澤先生が会長に就任されたことよって、茶の湯文化学におけるそうした新しい道が推進されるであろうと、大きな期待を寄せています。

平成十三年度第二回理事会

平成十三年五月二十七日（日）十一時より池坊短期大学第三会議室において本年度第二回の理事会を開催した。出席者は、理事十名であった。

倉澤副会長より、次期役員候補者と役割分担について説明があり、これを了承し総会に提案することになった。幹事は、留任の池田俊彦氏、岩崎正弥氏に加えて、新たに飯島照仁・松阪富美子の両氏に委嘱することになった。なお、三名の副会長は会長の会務総括を補佐するとともに、戸田氏は会員増加を、小泊氏は総合研究を、高橋氏は対外交流をそれぞれ任務とすることになった。

予算案については赤沼理事より説明があり、原案通り総会に提案することが了承された。

平成十三年度総会

今年度の総会を、五月二十七日（日）午後一時より、京都市下京区の池坊短期大学で開催した。

まず、谷端理事の司会進行のもと、中村会長の挨拶に続き、総会の議長選出が行われ、議長団に戸田勝久氏、小泊重洋氏が選ばれ議事に入った。

谷理事により平成十二年度の事業報告があり、総会、大会、研究会、例会を開催したこ



と、会報を四回、会誌第七号を発行したことが報告された。続いて赤沼理事より、これらの事業に関連して平成十二年度の決算報告が

なされた。その後議長より監査報告書について報告され、了承された。

次に今年度の事業案について谷理事により、今年度の大会については秋に東京で開催すること、十五回の研究会を相国寺で秋に、十六回の研究会を唐津の名護屋城で三月に開催予定であること、会誌は遅れている第八号に引き続き第九号も発行する予定であることなどが説明され、また今年度の予算案について赤沼理事より提案され、満場一致で了承された。

その間会員から、今年は茶の湯とも関係のある西大寺の叡尊の八百年忌であり何らかの記念事業を行ってほしいという要望や、旅費や通信費、理事選挙についての質問があった。これについては戸田議長から理事会に意見を反映させるべく努めるという発言があった。

続いて谷理事から新役員候補者の名簿について提案がなされた。中村会長から補足説明がなされたのち、満場一致で承認された。最後に新たに会長に選出された倉澤洋行氏から挨拶があり閉会した。

講演会

本年度総会の後、同じ池坊短期大学において楽吉左衛門氏に講演をお願いした。その要旨は次の通りである。

長次郎と私

楽 吉左衛門

日本人は、伝統は絶え間のない創造の結果といったりするが、伝統という言葉に余りに安易に使いすぎる。伝統の内の創造、伝統と創造を言葉できっちり考え直す必要がある。そうすることで、伝統を将来につなげることができると思う。その思いをもって楽家の代々の作品を眺めてみると、代々が伝統と創造をどう考えてきたか手に取るようにわかるようになった。その長次郎と代々の四〇〇年の歴史をお話したい。

桃山時代の代表的な陶芸作品である瀬戸、美濃、信楽、伊賀と長次郎の作品は全く違うものであるように感じる。桃山の陶芸作品は、相対的に大きく、変形されたりしているが、長次郎の作品は非常に小さく、意識がその小ささの中に押し込められている。小ささ

の中で、動き、装飾性、作者の個性といった国焼きの言葉そぎ落としたのが長次郎の作品である。長次郎には、天正二年の銘を持つ獅子瓦のような作品があり、狩野永徳の唐獅子図の動きや生命感と共通する造形性を示すが、こういったものを作った人物がどのようにして、「無一物」を作る人物が変わったのか、極めて興味深い。動から静へといった対極への変化は、利休の創意がなければ生まれなかったであろう。「無一物」の特徴を表すのに、シンプルといてしまいたくなるがそれでは表現できない。造形性、美しさといったものをそぎ落とした所に残りを残った姿としかいえないと思う。この長次郎の表現のあり方は、現代美術と共通する。

茶の湯文化学会 平成十三年度



この長次郎を頭にいただいた楽家代々は、どのように制作を引き継いでいくか、大きな悩みがあったと思う。しかし、悩みながらも決して長次郎を模倣しなかったことを、誇りにしたい。常慶の作品は、大ぶりで土を見せる。変形もある。のんこうの作品は、薄作りで、釉に艶があり、文様が出たりする。のんこうは、本阿弥光悦に接し、個性の発露としての作陶を学んでいる。

一人は朱の斑文を完成させ、宗入は長次郎に戻って、総釉の分厚くて小さい茶碗を作った。左入は、茶碗を造形として意識した最初の人で、了入はへらの入れ方でその後大きな影響を残した。茶碗の大きさを言えば、長次郎の小ささが、常慶・のんこうで大きくなり、宗入で小さくなる。その後長入で大きくなり、慶入へと次第に小さくなっている。それは、千家茶道の状況と密接に関係しているのではないか。

覚入は、楽の様式を守り基本の造形をこわさないようにしながら、何を現代として表現するか考えた人である。その父覚入の踏みとどまろうとした楽焼きの伝統から、私は一歩はみだしたように思う。

開催した。これは特に若手研究者の発表の機会を増やすという趣旨で開催したもので、研究発表形式で行った。

近世後期南河内地域における茶の湯

―富田林杉山家・仲村家の事例を中心に―

堀内 紀彦

近世後期の町人、農民層の茶の湯とはいかなるものであったのか。研究史をふりかえると、家元制度研究を基礎に均質的なイメージが形成され、高い評価を得ないが故に研究も進展を見なかったように思われる。本報告では、文化期から安政期の南河内在郷町、特に富田林の酒造家である杉山家と仲村家の茶会史料を中心として南河内広範にわたる茶の湯を紹介し、家元制度研究の成果とは異なる歴史像を、「地域社会・地域文化の成熟に支えられる茶の湯」という視点から新たに提示したい。

主旨は以下二点。

①当地域では、茶の湯が日常・非日常両面において富裕層中心に受容され、子女教育に必須の教養とも意識される。稲垣休史や速見宗達らを介して「流儀」の知識も伝達されるが、「流儀」は必ずしも拘束性を持たず、地

平成十三年度第二回理事会

七月二十一日(土)午後五時より、池坊短期大学第二会議室において本年度第三回目の理事会を開催した。出席者は理事十四名と幹事四名の計十八名。

倉澤新会長の挨拶と自己紹介形式による新役員紹介の後議事に入った。倉澤会長より、総会終了後新役員に選出された方々に就任依頼を出したところ、山田哲也氏と原田茂弘氏から理事辞退の申し出があったので受理し、あわせて両氏の希望に従い両氏を幹事に再任したい旨提案があり承認された。

査読委員について、高橋副会長から、逝去された布目潮瀧氏の後任として石川忠久氏を推薦したいとの提案があり承認された。

また、戸田副会長から、本年度の大会は、十一月に東京のプラザエフで、希望者の研究発表を第一部とし、珠光を統一テーマとした発表とシンポジウムを第二部として行いたいとの説明があった。日程等細部については担当で検討することになり、案については承認された。

その他、研究会、例会、会誌、会報につい

方知識人の教養と交流を前提とした自由な創意工夫が茶の湯を支えている。「流儀の浸透」と「文化的創造性の喪失」をセットとして語ってきた研究史には見直しが必要である。

②当地域における豪農・豪商達の茶の湯は、茶道具への強い関心・道具収集意欲・子女教育など、近代茶の湯への展開を想起させる要素を多く含む。また本報告では紹介しなかったが、明治初期の茶会記も残存する。近世後期の茶の湯研究は、近代における茶の湯の展開を見据える上においても必要となる。

『茶経』研究の諸問題

―日中の比較を中心に―

顧 雯

中国と日本は『茶経』について、それぞれ独自の観点をもって研究を進めてきた。

日本側の研究の原点となる『茶経詳説』(大典禅師 一七七四年刊)は、日本茶道思想を背景としたものである。布目潮瀧氏の『中国の茶書』(東洋文庫 一九七六年)に収めた『茶経』注釈はその代表であると言える(二〇〇一年八月、その後の研究成果を踏まえた『茶経詳解』が刊行された)。

一方、呉覺農氏の『茶経述評』(農業出版

て報告のあった後、谷理事より、ホームページについて、アクセス数が少なく内容をもっと充実したものにしたいので、担当セクションを新たに設けてほしいとの要望が出され、若手スタッフの充実をはかることになった。

戸田副会長より、会員の増加をはかるため、学生会費を設けたり、行事をポスター等で宣伝する必要があるのではないかとといった提案がなされ、会費の設定や在庫会誌の有効な使い方等を今後検討することになった。

小泊副会長よりは、文化系研究者の多い茶の湯文化学会と、理科系研究者の多い茶学術研究会とが共同の研究会を催すなどの方策が示された。

また、高橋副会長より、対外交流については、まづ学問的研究を重点とする中国の団体、例えば中国国際茶文化研究会、湖州陸羽茶文化研究会などと交流を図るのがよいとの意見が述べられた。

例 会

近畿例会

三月十七日(土)午後二時より、池坊短期大学において、平成十二年第三回の例会を

社 一九八七年)をはじめとする中国の『茶経』研究は、日本と異なる点がある。その中で、『茶経述評』は、中国『茶経』研究の代表と位置づけることができる。

今回の発表では、『茶経』解釈に関する日中の相違を検証するため、布目氏と呉氏の注釈を取り上げることにした。両者の見解が最も大きく分かれていたのは、「一之源」の「為飲最宜」の解釈をめぐってであって、これと連動して、①「一之源」の「精行儉徳之人」・「聊四五啜」・「採不時造不精雜以升」、②「五之煮」の「茶性儉不宜廣」、③「六之飲」の「淹茶・用葱薑棗橘皮茱萸薄荷之等煮之百沸」・「或煮去沫」、④「六之飲」の「茶有九難」の所で解釈が分かれていた。

それぞれの解釈の持つ意義を検討した結果、「清飲」と「精飲」という二つの観点が重要と考えられた。「清飲」とは「飲茶の儉(奢らず)」の「茶の儉徳」よりきた考え方として、布目氏が主張してきた。「精飲」とは「飲茶の精(怠らず)」の「茶の精徳」よりきた考え方で、『茶経述評』が主張している点を見なすことができる。

『茶経』の「為飲最宜」への追求とは、「精行儉徳」という語が表すように、「中庸的く口せばき釜」があげられており、これは雲龍釜のような筒形の形態を考えさせる。しかも天正七年に利休が使用した「宗易のしよりの釜」は「当世は如何」とされているのである。『宗湛日記』は天正の十四年から始まっており、これは利休が活躍した年代であり、利休によって新たな茶道具が創造された時期であった。京の吉田神社の神官吉田兼見の日記『兼見卿記』天正十五年(一五八七)九月一二日の条に「東陽坊罷向、今度御茶湯出座之儀相談、直三条釜鑄所へ合同道釜一取之、代二〇〇疋、宗易形ヲ出シ、如此之由、申畢」とあって、茶を始めた兼見が三条釜座に行つて釜を直接買ったという事は、一五世紀以来芦屋や天明のレイメイの釜を使っていたことから京でオーダーメイドの釜が使われるようになったことを明確に示している。

芦屋は、こうした茶人の釜に対する好みの変化や、遠隔ということのほか、庇護者ともいべき大内氏が滅亡したこともあって、衰微していき、天明も京釜の台頭によって、その注文が減少していったものと考えられる。

な考えかたで実践することであり、飲茶には「精」を行い、「儉」の徳で制することが茶道の理想であると理解される。

東京例会

五月二十六日(土)午後一時から、東京芸術大学において第二十三回の東京例会を開催した。内容は次の通りである。

茶湯釜―芦屋と天明から京釜へ―

原田 一敏

一条兼良の『尺素往来』に「鐘子者葦屋」と記されているが、たしかに『看聞御記』、『大乘院寺社雜司記』、『親元日記』、『蔭涼軒日録』などには芦屋釜が進物あるいは購入されたことが見え、十五世紀から十五世紀後半にかけて京や奈良で賞用されていたことが知られる。また、『金剛三昧院文書』にも高野山金剛三昧院領の筑前粥田庄から、文明十一年(一四七九)、京の將軍家の近習たちに土産として送られたことが記され、さらに同文書には芦屋釜が一口二〇〇文から二五〇文の価格で購入されており、一方畿内では釜一口五〇〇文であったことが知られる(『蔭涼軒日録』延徳四年(一四九二)八月



中国上虞「呉覚農茶学思想研究会」

設立大会に出席して

顧 雯

二〇〇一年五月二日、中国浙江省上虞市で「呉覚農茶学思想研究会」の設立大会が開催された。中国の内外から一二〇名の茶の専門家、学者が呉覚農の故郷上虞に集まった。大会の趣旨は、中国茶学の開拓者であり、現代中国の「茶聖」と呼ばれる呉覚農を偲ぶこと、さらに中国茶文化の中で一つの重要な位置を占める呉覚農茶学思想を弘揚することであり、そのために、呉覚農の中国茶学に対する熱意、無私の貢献精神を改めて考えることであった。

呉覚農(一八九七―一九八九)は、中国農業省副大臣・北京農学院教授を務めた、現代中国茶学、茶の教育と研究の開拓者であり、茶業公司、茶葉研究所、茶研究の高等教育機関の創始者である。上虞県の出身で、青年時代祖国の農業振興のために献身することを決意し、覚農に改名したという。

五日条

一方、天明釜については、記録が少なく、わずかに正親町天皇女房奉書写(天正一〇年八月一日)に「天明のいものしより、ふる火はちりよう作としてしん上候のよし、御心へ候て、真繼に申つけられ候へく候、殊に絵ともものうつくしき見へ、よろこひおほしめし候」とあるのが知られるに過ぎない。むしろ天明釜とおもわれる釜の使用状況が窺われるのは、『松屋会記』、『天王寺屋会記』、『宗湛日記』といった茶会記である。これら三書には、名称から推測して天明釜が多く用いられており、それは芦屋釜を凌駕しており、一六世紀には、むしろ天明釜が賞用されていたことを示している。また『宗湛日記』には新釜と古釜の使い分けが多く見られる。つまり芦屋釜が制作された当初はいわゆる広間の茶席で用いられたのに対し、天明釜は侘茶の隆盛とともに、選択されるに至ったと考えられる。

さらに『山上宗二記』をみると、名物の釜は十八口掲げられていて、それらは「当世は用いず」、「古今の名物」、「当世は如何」、「数寄道具」の四つの評価がなされており、さらに近頃流行っている釜として「上へなが

浙江農業技術学校(浙江農業大学の前身)を卒業し、母校の助手を務めている一九一九年、国費留学生として来日、当時の静岡茶業試験場で三年間実習のかたちで学んだ。一九二二年中国に帰るまでの三年間に二篇の論文を書いた。『中国茶業改革方案』と『茶樹原産地考』である。また、一九四九年には『AL ABOUT TEA』を訳した『茶葉全書』を出版したが、これは十一年の歳月をかけ、出版の費用も自分で出した労作である。早くから、中国茶の歴史文化を大切にするとともに、世界の茶文化への理解の努力をしていたのである。

一九八七年、九十大寿を記念して、中国茶葉学会により『呉覚農選集』(上海科学技術出版社)が編纂され、茶の起源、歴史、産品評、流通、国際貿易、人材の育成にわたる六十一篇の主要な文章が集められた。「呉覚農茶学思想」の大集成である。生涯、実践と理論の両面で、中国農業、とくに茶業の研究に携わり、茶の文化史料、茶の科学、茶の経済と茶の対外貿易の研究に大きな業績を挙げた。

著書には『茶樹栽培法』(上海泰東書房、一九二三年)、『中国茶葉復興計画』(上海

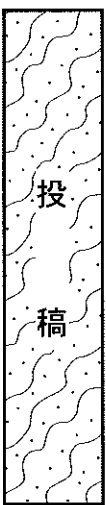
商務印書館、一九三四年)、『中国茶葉問題』(範和均と共著、上海商務印書館、一九三七年)、『中国地方誌茶葉歴史選輯』(農業出版社、一九九〇年)、『茶経述評』(農業出版社、一九八七年)などがある。八十七才の高齢で完成させた『茶経述評』は、『茶経』研究の新たな記念碑ともいえるべきもので、堅実な学風と豊かな学識を示し、中国における二十世紀の『新茶経』とも呼ばれる。これにより呉覺農は、中国における『茶経』研究の第一人者になった。

今大会の開催地である上虞市は、ちょうど上海、杭州、寧波の三都市の中間に位置する。曹娥江の下流にあり、昔から交通の要となっていた。二二年秦が県を設置して以来二二〇〇年の歴史を持つ。一九九二年市に昇格し、現在に至っている。

陶磁界では、上虞は世界の「青磁」産地の源として公認されている。このあたりではまだ三〇〇カ所の歴代の窯が残され、早くから青磁生産の中心地であったことを窺わせる。浙江省が隋代に置かれた越州に属していたので、この地方の青磁は「越州青磁」、略して「越磁」と呼ばれ、その窯は、「越窯」と呼

ばれていた。陸羽(七三三―八〇四)は『茶経』に「越窯は玉の如く、氷の如く、色は青くて、茶の色は緑に見える」と賞賛している。実際には、越州青磁の分布は上虞を含め、浙江省の東南の海岸部にあたる。

上虞はまた、日本に茶種を持ち帰ったとされる最澄に縁のある土地で、ここには、最澄の密宗受法聖地「峰山道場」がある。「峰山道場」は今の上虞市の峰山にあった。峰山はかつて曹娥江における有名な渡しとして名が知られていた。しかし、現在では、曹娥江の流れが変化したため、渡しはもろろん無くなっている。また、峰山から大量の石を採ったため、今の峰山は海拔が四〇・三メートル、東西の長さが三三〇メートル、南北の広さが一八〇メートルの小山となっている。(以下次号)



帛紗の縦横についての疑問

廣田 吉崇

長年茶道の稽古をしていて今頃気付くのも迂闊な話であるが、帛紗の縦横がわからず困っている。帛紗が正方形ではなく、縦横の寸

る。師匠に尋ねたところ、わさの方が長いものが正しく、その理由は、反物を切つて帛紗を作るのだから、同じ寸法ならば、わさの方を長くすることにより、切り取る丈が短くなり、一つの反物からその分たくさん取れるからとのことであった。わさの方が短いとすれば、長い裂を切り取り、さらに耳の部分より多く切り落とさなければならぬ。昔の人々の質実な精神を考えれば、なるほどこれは説得力のある理由だと思わざるを得ない。

石州三百ヶ条第一巻八十四に「服紗二ツ有之事」があり、この注釈の現代語訳から関係する部分を引用する(なお、寸法は曲尺)。覚書「寸法は両耳を切り捨てて一尺五分、縦九寸。これは縫上りの寸法である。右の一方をわな(輪)にして三方に縫目がある。(中略)仕立様は、両方の耳を横にして、横は一尺か一尺一寸まで、(中略)縦は折返して八寸七八分から九寸五分までに仕立てるのである。」、清水道竿の注釈「横一尺一寸、また、一尺五分、縦八寸三分、五分まで。(中略)縫いかたは表へ裏から下へ折返して両脇下三方を縫合わせるのである。」、自牧の注釈「耳を横にして二つに折返して縫うのである。耳のほうを横で幅一尺五分、大きなのは

一尺一寸にも仕立てるのである。(中略)縦は大きな服紗は九寸五分、あるいは九寸八分にもする。」(松浦祥月「石州流三百箇条集註抄十一」、松親会『鎮信流抄』第二十号、昭和五一年、三五乃至三七頁)。縦と横の表現が紛らわしく、多少疑問は残るが、これらによれば、わさを上にして両脇下の三方を縫合わせ、わさの方が長いと考えられる。

これは石州流だけのことであろうか、いくつか文献に当たってみたが、寸法の記述はあっても、わさの位置にはふれていないものほとんどである。古田織部正殿聞書に「長サ九寸幅八寸五分也。(中略)縫様ハ二ツ折ニシテ折(たる方其儘縫目なし。三方ハ貝の口に合て縫、二ツ折)之端ノ方へ長ミヲシテ九寸ニ仕也。」(『古田織部茶書一』思文閣、昭和五一年、一一一頁)という記述があり、文意はわかりにくいだが、わさの方が長いように読めるのではないかと思う。

北村徳斎帛紗店の話や石州三百ヶ条の帛紗の作り方の記述からは、帛紗のわさは上であるとの印象を受ける。しかし、点前の稽古をされた方ならおわかりだと思うが、最初に帛紗を畳むときはわさを縦方向にするので、点前をする立場からは、帛紗のわさは縦である

法が少し異なること、帛紗の三方が縫目、一方がわさになっていることは、多くの流派に共通すると思われるが、一体わさの方が長いのか短いのかどちらなのだろうか。

現在刊行されている点前の教本を調べてみたところ、裏千家では「縦二八センチ、横二七センチで、横は、わさ(輪)」とある(鈴木宗保・宗幹『裏千家茶の湯』主婦の友社、昭和四六年、一七頁。なお、別の裏千家の教本では「約二七センチ×二六センチ」とある。千宗室『新版裏千家茶道のおしえ』日本放送出版協会、昭和五九年、一〇二頁)。他の教本でも縦横の寸法は書いてあるが、わさの位置は不明である。ちなみに表千家では「縦二七センチ、横二八センチ」とある(千宗左『表千家』主婦の友社、昭和四九年、一一八頁)。そこで、北村徳斎帛紗店に尋ねたところ、わさは上、寸法は鯨尺で縦七寸五分、横七寸二分と教えられた。計算すると縦二八センチ、横二七センチになる。表千家も裏千家も同じはずですと言われたので、単に縦横の考え方が異なるだけかも知れない。要するにわさの方が短いという結論になる。

ところが、私が稽古している鎮信流(石州流の一派)の帛紗はわさの方が長いものがあ

と感じられる。先日茶道資料館の「茶道入門―茶の湯を楽しむ―」の展示(平成一三年六月一六日から八月二六日まで)を拝見したが、帛紗はわさを右にして飾られてあった。すなわち、作り手と使い手で帛紗の縦横の感覚が異なることになり、こうしたことから何らかの混同が起こってきているのではないかと推測される。

このことについて、どなたか詳しいことをご存じの方があれば是非ご教示いただきたい。



二〇〇一年国際OICHA学術会議が、一〇月五日(金)から八日(月)まで(※テクニカルツアーは九日に実施)、静岡県コンベンションアーツセンターを会場に開催されます。

参加予定者は約二〇の国や地域からの八〇〇名。

参加登録料は三五〇〇円(学生一八〇〇円・同伴者登録一〇〇〇円)で、この中には、シンポジウム・学術プログラムなどの会議参加、アストラクト、プロシーデイン

	歴史・文化	生産	効能	流通・消費
10月5日	登録受付(グランシップ)			
午前	開会式(パルコホール)			
午後	特別講演 「茶文化と海運路」 「中国費南は茶の起源地か」 (日・英同時通訳)	ミニシンポジウム 「バイオテクノロジーの応用」 (日・英同時通訳)	「新しい機能性」	「日本茶業の将来展望」 (日本語)
夕	ウェルカムパーティー			
10月6日	合同シンポジウム 「茶の起源と伝播を探る」(日・英同時通訳)		「生体内抗酸化作用」	「世界茶業の現在と将来」 (日・英同時通訳)
午後	ポスターセッション 「茶文化の発展」(日・英同時通訳)			「これからの茶流通と消費動向」 (日・英同時通訳)
夕	「育種・栽培」 「生体内動脈」			
10月7日	「喫茶の歴史」 (日・英同時通訳)	「土壌肥料・病虫害防除」	「茶の多目的利用」 (日・英同時通訳)	「茶の新利用と新製品」 (日本語)
午後	ポスターセッション 「茶文化の多様性1」 (日・英同時通訳)			「茶の新利用と新製品2」 (日本語)
夕	「製 造」 「がん予防」 (日・英同時通訳)			
10月8日	フェアウェルパーティー			
午後	「茶文化の多様性2」 (日・英同時通訳)	「化学・生化学」	「がん予防 2」	「茶の品質管理」 (日本語)
夕	閉 会 式			

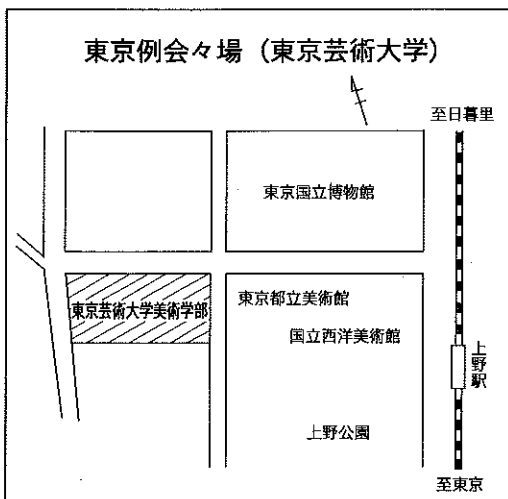
グス、パーティー等の料金が含まれていません。
 詳しいことは、二〇〇一年国際OICHA
 学術会議事務局(静岡市追手町九一六 電話
 〇五四―二二―一三三三五 ファックス〇五
 四―二二―一三三九九)までお尋ねくださ
 い。

例会のご案内

東京例会

次の日程で開催します。会場は東京芸術大
 学(東京都台東区上野公園)です。ふるって
 ご参加下さい。

- 九月二十二日(土)午後一時から
 「茶室にみる探光の推移」 秋枝ユミ
- 「近代数寄者の茶室とその源流」 桐浴邦夫
- 十一月十七日(土)午後一時から
 「珠光名物の成立過程」
- 「山上宗二記以前を見る」 矢野 環



後記

*先号では、最初の部分で校正ミスをして
 しまいました。榎本徹さんの文の題名は、
 「パリの『萩焼四〇〇年』」でした。萩と
 萩、間違いやすいとはいえ申し訳ないこと
 をしました。榎本さん、それに読者のみな
 さんに深くお詫びします。

*今年五月まで会長を務めていただいた中村
 昌生先生に、退任にあたっての思いを書い
 ていただきました。中村先生を初め、副会
 長を務めていただいた林屋先生や村井先生
 には、新しい学会を作りまた運営を軌道に
 乗せる上で非常なご苦労があったことと思
 います。お疲れさまでした。

*顧愛さんには、今春中国の上虞で行われた
 呉覚農茶学思想研究会の設立大会の模様を
 報告してもらいましたが、後半部分
 は来号に廻させていただきます。

*近年会費の納入状況がかんばしくないよう
 です。学会の発展のために、会費の納入を
 よろしく願います。

*総会の報告にも書いておきましたが、今年
 の大会は、十一月十八日東京で開催しま
 す。そろそろ秋の予定をたてられる頃かと
 思います。予定の中に大会も組み込んで
 いただければ幸いです。